

幕末維新期の異文化接触と岩倉使節団

——イギリス訪問と教育視察を中心に

太田 昭子

琉球／沖縄、遣唐使と留学僧などに視点が広がったところで、岩倉使節団に話を戻してしまいが、お許しいただきたい。本日は幕末維新期における異文化接触の流れを概観しながら異文化接触モデルを紹介し、さらに岩倉使節団を通して、「異文化接触と文化創造」の可能性について検討する。

1) 異文化接触の枠組み

1. 幕末維新期の日本人の異文化接触

1860年代～1870年代は、幕末維新期の日本のみならず、世界各国でも政治・経済や社会が大きく変化し、異文化接触の形態が多様化した時期に当たる。幕末維新期において、日本人がどのように異文化情報と接したのか、その変容過程を概観し、主な特徴を整理すると、次の三つにまとめられる。

(1) 徳川時代のいわゆる鎖国政策は、幕府が異文化接触における人・物・情報の流れを掌握し一括管理を図るもので、この時代はごく一部の人が文字主体の海外情報入手していた。しかし幕府が情報の一本化と独占を図るシステムの維持は次第に困難になり、19世紀に入ると綻びがあちこちで顕在化し、日本は開国へと舵を切ることになった。

(2) 万延元年の遣米使節を皮切りに、1860年代から限定的ではあるが、日本人が海外渡航できるようになり、海外に「行って知る」という、新しい手だてが加わった。外国から日本に入ってくる従来の文字情報主体の異文化情報に加え、日本人が自ら海外へ出向き異文化に触れ現地情報を持ち帰るという、新たな流れが加わり、〈行って知る〉時代が始まったとも言える。実際海外に赴き直接異文化に触れることは、五感の感覚を伴う新鮮な生身の体験で、新しい情報収集のチャンネルが広がった。ただ、1860年代前半の日本には攘夷の機運が優勢で、せっかく海外から情報を日本に持ち帰っても、日本国内ですぐ大々的に広められなかった。1860年代半ば以降、攘夷運動が次第に鎮静化に向かうにつれ、異文化情報を受け入れる土壌が日本国内に整っていき、明治維新以降この流れが更に加速していった。

(3) 日本国内の受け入れ態勢の変化により、ごく一部の人々が海外の情報を得る時代から、国内の幅広い層に海外の情報が伝播する時代が訪れ、多くの人々が、自分の生活圏に居ながらにして海外の情報を得られるようになった。言い換えれば、〈居ながらにして知る時代〉が訪れたのである。海外に実際に赴き情報収集した人々は、何をどのように誰に伝えるかを念頭に置きながら異文化情報を整理し、国民の啓蒙方法を模索するようになり、その過程で教育の重要性が改めて認識されるようになった。このようにして幅広い人々が国内の生活圏に居ながらにして海外情報に触れ裾野を広げ、異文化情報が蓄積されていった。

ここで挙げた (1) (2) (3) の関係性について申し添えると、(1) が (2) や (3) に取って代られるのではなく、(1) の上に (2)、更に (3) の局面が積み重なり、その過程で異文化情報が更新されたり上書きされたりしながら蓄積されていったと考えると良いだろう。

2. 〈居ながらにして知る〉時代と博覧会

実は、〈居ながらにして知る〉時代が訪れていたのは、幕末維新期の日本だけではなく、例えば、同時代の西洋諸国に目を転じると、1851年にロンドンで開催され大成功を収めた万国博覧会、その後、西洋諸国で盛んに開催された、万国博覧会や勸業博覧会などがその代表例として挙げられる。詳しい内容は省略するが、一般市民も博覧会に出かけ、楽しみながら知識を得ることが可能になったが、その背景に、鉄道網や交通網の整備や情報網の発達、イギリスの場合、穀物法の廃止などで物流が盛んになったこと、情報や知識の伝播に関わる新聞税などの課税が廃止されたことが挙げられる。また、岩倉使節団が各国で訪れた植物園や動物園、博物館なども、人々が比較的身近な場所で世界の珍しい生き物や展示物に触れる機会を与える施設だった。これらはいわゆる箱物の教育ではなく、もっと幅広い教育機会の場であり、人々が居ながらにして海外や未知の世界について知ることが、世界各地で同じ時期に奨励されていたのである。つまり、幅広い層の人々が〈自分の生活圏に居ながらにして知る〉ことの有用性が大いに注目され、先進性のバロメーターとして認識されていたとも言えるだろう。

3. 文化触変モデルの紹介

幕末維新期の異文化接触を論じる際、個別のケースを包括する全体的な枠組みを考えることも重要である。そこで、平野健一郎氏が提唱した文化触変モデルを紹介したい。平野氏は、文化的関係としての国際関係という視点に着目し、国際政治を国際文化論の視点から論じることの重要性を説いて、様々なモデルや事例を示した。その中の一つが文化人類学や国際関係論などの枠組みに基づき文化触変 (acculturation) 過程を提示したモデルである (平野健一郎 2000、58 頁)。21 世紀の今、このモデルを安易に援用するのは

慎むべきだが、歴史的事例を考える際にも参考になることに改めて気づかされる¹。

異文化に接する際、私たちは自分にとって馴染み深い文化的な土壌や既存の知識、異文化接触の目的や動機などの〈フィルター〉を通して物事を見ようとする。異文化を理解し、新たに得た情報について価値判断を行ない取捨選択するが、そこには同意や共感だけでなく誤解、反発や抵抗、黙殺、軽視なども含まれる。つまり〈フィルター〉は、必ずしも異文化接触に肯定的に作用するとは限らず、その種類は、多岐にわたっている。しかも、異文化要素を〈フィルター〉にかけるタイミングは一回だけにとどまらず、何回も訪れる。異文化接触を経て、バランスの取れた状態（平野氏はそれを〈平衡〉と呼んだ）に達しても、その後、新たな異文化要素に触れると、〈フィルター〉を通して文化触変がまた始まる、ということが繰り返される。更に、異文化接触のアクターとして、海外渡航などを通して異文化に接した側だけでなく、自国に渡航してきた外国人に接し情報を提供した側にも異文化接触が生じたことに目を向ける必要がある。このように概観しただけでも、幕末維新期の日本人の体験した異文化接触が、複合的な要素の絡み合う複雑なものだったことは、一目瞭然である。

4. 幕末維新期の異文化接触——〈知〉に向かう旅と文化創造

異文化の知識や情報などに触れる経験は、自分たちに馴染みのある文化的な土壌とは異なる価値基準に根差した文化との出会いを意味している。幕末維新期に海外渡航した日本人が体験した異文化接触の多くは、旧来の価値観とは異なる物事の捉え方、考え方の新しい枠組みと向き合う体験でもあった。彼らはそれぞれの立場から、新しい情報・知識・見識などの価値判断や論評を絶えず行ない、物事をとらえる視座を増やし、視野を広げようと努め続けた。異文化に初めて接した当初は、無我夢中で手当たり次第に目新しい情報を集めたとしても、異文化に触れる経験を重ね、情報や知識の精査と吟味を繰り返すうちに、そこにある種の方向性が生まれたと言えるだろう。そして異文化に何を・何故求めるのか（あるいは求めないのか）という問題意識を基軸に異文化接触に臨み、個々の情報の根本にある異文化の特質を見極めるようになっていった。

彼らがこのようにして到達した信念、理念、価値観、精神、信仰なども内包する新たな知見は、情報や知識のレベルを超え、考え方の枠組みそのものと深く関わるものだった。異文化接触により育まれたのは、収集した情報を体系的・有機的に関係づけて理解し判断する能力と主体性、すなわち〈知〉とも呼べるものだったのではないだろうか。〈知〉に向かう彼らの旅とは、主体的に〈知〉を組み立てていく取り組みであり、そこから彼らの思想が形成されていったのではないか。彼らにとって、〈知〉の追求とは、漠然とした知識の探求ではなく、自分自身や帰属先に欠けている〈知〉のあり方を自覚した

1 筆者は学部生時代に、国際関係論コース設置の「文化接触論」（平野健一郎教授担当）を履修し、平野氏の研究に接した。

上で、欠けている要素の追求を目指したと言えよう²。彼らは様々なフィルターを通して取捨選択した海外情報を、包括的な〈知〉という概念に昇華させ、それぞれのスタイルで主体的に〈知〉と向き合っていたのであり、そのアプローチを総合的にとらえることが、後世の私たちに肝要である。そして、このように〈知〉と向き合った彼らの姿勢は、文化創造につながっていったのではないかとも考えている。

2) 岩倉使節団とイギリスにおける教育視察から見えるもの——使節団別働隊

1. 岩倉使節団別働隊と新島襄

岩倉使節団には、各省から派遣された理事官と随行で構成される26名の専門家集団が参加していた。本報告では彼らを使節団本隊と区別して、別働隊と呼ぶ。文部省からは理事官の田中不二麿（文部大^{たいじょう}丞）と5名の随行が派遣され、各国の学制や教育行政に関する情報を収集し、帰国後、欧米各国の教育制度をまとめた調査報告『理事功程』を提出している。岩倉使節団本隊のアメリカ滞在が長期化する中で、各省派遣の理事官たちは自ら願い出て次々に本隊を離れ、各専門分野の視察に出発した。文部省派遣の教育視察チームも同様で、田中不二麿はワシントンで新たに田中の通訳官として加わった新島襄とほぼ行動を共にした。1845年7月生まれの田中、1843年2月生まれの新島は、当時まだ20代後半だったが、訪問先で教育界の重要人物に次々に面談を申し込み、精力的に各国の教育事情を視察した。

2. 新島襄の任用に見られる選択の主体性

ここで注目したいのが、新島襄の任用に見られる岩倉使節団の選択の主体性である。新島襄（1843～1890）は英学を志して1864年に単身アメリカに密航、キリスト教が禁教だった時代にキリスト教に帰依し、アマースト・カレッジ（Amherst College）を卒業後、アンドーヴァー神学校（Andover Theological Seminary）で神学を学んでいた。彼は米国駐劄少弁務使の森有礼（1847～1889）の目にとまり³、森有礼らの招請に応じ、現地採用されて田中の通訳官を務めることになったのである。

新島は最初から宗教の話題を持ち出さなかったが、行動を共にして親しくなるにつれ、教育と関連づけてキリスト教について踏み込んだ発言をするようになった。民の知性と

2 木田元氏は、哲学の根幹にあるのは〈知を愛すること〉であり、それは自分に欠けている知識を獲得しようと追い求めることだと述べているが、幕末維新期の日本人の異文化接触体験はこれと相通ずるのではなかろうか（木田元『基礎講座 哲学』、ちくま学芸文庫、2016年、42～45頁）。

3 新島襄を推挙した森有礼は、自身もキリスト教に深く関わり、日本の禁教政策がアメリカ政府との条約改正交渉の難航の一因になっていると痛感していた。森は1870年に発布された大教宣布の詔に対して批判的な立場をとり、1872年10月に *Religious Freedom in Japan* を上梓、信仰の自由は基本的人権であると主張した。

品性を高めるには教育が有用で、キリスト教の理念がその目的にふさわしいと論じる新島に対し、田中は態度を留保したが、新島は日曜礼拝を欠かさないなど敢えてキリスト教の習慣を守り、田中に聖書を少しずつ教えようとした。このような新島の言動は充分予測できた筈だが、それでもなお、使節団が彼を理事官の通訳に任用したのは何故なのか。

歴訪先の欧米諸国で折に触れキリスト教禁教政策に対する批判の矢面に立たされていた岩倉使節団にとって、禁教政策撤廃は時間の問題とも言える懸案事項で⁴、むしろ撤廃後の日本における宗教政策を構築する上で、西洋諸国におけるキリスト教の役割を知ることの重要性も、彼らは認識していた。新島襄のように敬虔なキリスト教徒を通訳官として田中不二麿に同行させることは日本の精神的近代化に役立つとの目算から、森は新島を推挙したと考えられる。また新島襄の資料から、田中不二麿がキリスト教とは一定の距離を保ちつつも、新島を通して、キリスト教の理念やキリスト教が教育に果たす役割などを知ろうとしていた様子がうかがわれる。つまり新島襄の任用自体が、情報収集における岩倉使節団の主体的選択という行為に他ならなかった。そしてそれが、岩倉使節団の内部でも一種の文化接触を起こしていた点にも注目すべきだろう。

3. 新島襄と田中不二麿の行なった教育視察の注目点

新島襄と田中不二麿は主だった訪問先で、例えば、ジェイムズ・フレイザー (James Fraser)、ウィリアム・E・フォースター (W. E. Forster)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) など、当時のイギリス教育界における重要人物⁵をまず訪ね、情報収集を行なった上で紹介状を書いてもらい、ネットワークの開拓と拡大を図りながら、系統だった視察を効率的にこなした (図1) (図2) (図3)。新島のキリスト教に対する見方がバランスの取れたものだったことは、彼の残した記録から読み取れる。教育行政の探索を主眼とする田中不二麿に対し、新島は教育行政だけでなく学校運営に強い関心を抱いていた。キリスト教徒の新島が日本でキリスト教系の学校設立を視野に入れ、イギリスの学校運営

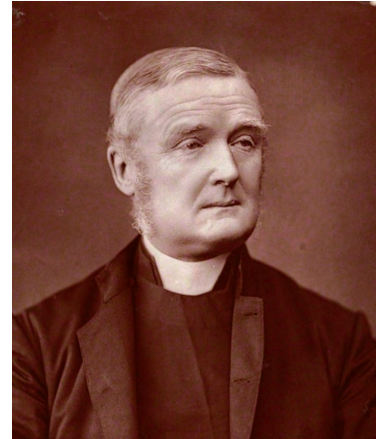


図1 ジェイムズ・フレイザー
(Fraser, James: 1818-1885)

出典: COOPER, Thompson, *Men of Mark*,
(London: Sampson Low, Marston, Searle
and Rivington, 1878).

4 日本政府がキリシタン禁制の高札撤去し、キリスト教禁教が終わったのは、1873年2月だった。岩倉使節団本隊は、歴訪先の各地で、様々なキリスト教会を訪れている。

5 James Fraser (1818～1885: マンチェスター主教、教育界に幅広い人脈を持っていた)、W. E. Forster (1818～1886: イギリスの教育改革を担っていた)、Matthew Arnold (1822～1888: 詩人・文芸評論家としても著名な視学官。視学官はイギリス国内の学校を視察、教育環境をチェックし、生徒たちに口頭試験も行なった)。



図2 ウィリアム・E・フォースター
(Forster, William Edward: 1818-1886)
出典：COOPER, Thompson, *Men of Mark*,
(London: Sampson Low, Marston, Searle
and Rivington, 1878).



図3 マシュー・アーノルド
(Arnold, Matthew: 1822-1888)
出典：Prose Masterpieces from Modern Essayists,
(London: Bickers & Son, 1886).

に強い関心を示していることは好印象を与えたようで、その姿勢に共感したイギリス側は一貫して情報提供に協力的だった。これも別働隊の教育視察における注目点と言えるだろう。

4. 新島襄の〈異文化接触の旅〉と〈知〉、文化創造へ

新島襄の〈異文化接触の旅〉を整理すると、アメリカに密航しキリスト教に帰依して信念を形成したのが、新島にとって〈知〉の獲得の第一局面、岩倉使節団別働隊に随同行して行なった教育視察の旅が〈知〉の獲得の第二局面、そしてこれらを踏まえて新島の目的意識は、獲得した様々な〈知〉をいかにして広めるかという点に向かい、それが1875年の同志社設立として実を結んだと総括できる。

同志社設立に向けて新島の取った行動は迅速だったが、その背景にはドイツでの体験も影響している。イギリスの旅を終え、田中不二麿と共にドイツへ渡った新島は、現地で日本人留学生たちに会う機会を得た。1872年当時、ベルリンには日本人留学生が80人ほどいたが、新島の目には彼らが異文化接触の機会を与えられながら、偏見に満ちた言動に終始していると映ったようである。留学先でキリスト教に触れてもそれを受け入れようとしないエリートたちが存在することを敏感に感じ取った新島は、彼らが動き始める前に、日本におけるキリスト教教育に着手しなければと考えた⁶。そして強く慰留す

6 「このような連中が帰国すると、彼らは日本に存在するようになったばかりのキリスト教会の活動を大いに妨害することになるでしょう」と新島は危機感を募らせた (To Susan Hardy, Berlin, October 2, 1872, 『新島襄全集』第6巻、122頁)。

る田中を振り切るように、いったんアメリカに戻って学業を終えてから帰国し、同志社設立を急いだのである。

別働隊への同道は、新島にとって、訪問先の国々の新しい情報を入手する機会となっただけでなく、新島が同時代の日本人の気質の一端を知る機会にもなり、それが次なるステージとも呼べる行動へと向かわせたとも言える。このように、新島の別働隊参加から浮かび上がってくるのは、明治初期の日本人における異文化接触の様々な形ではないかと考えている⁷。異文化接触と言うと、外国文化との接触に目が向けられがちだが、実際には、日本人同士の中でもこのような異文化接触が起きており、それが新島の場合、同志社設立という文化創造につながっていったのではなかろうか。

3) 岩倉使節団とイギリスにおける教育視察から見えるもの——使節団本隊

岩倉使節団本隊に関しては、岩倉使節団本隊の行動と、『米欧回覧実記』を編纂した久米邦武の功績について、異文化接触の観点から、紹介したい。

1. 使節団本隊の不思議な教育視察日程とその背景

岩倉使節団本隊は、一般的なイギリスの初等教育機関を殆ど訪れていなかった。視察先には、地域密着型の私立校クライスツ・ホスピタル校 (Christ's Hospital⁸)、産業と結びつきの強い学校 (例えば、職業訓練学校、工場経営者の運営する学校) や産業資本家の作ったモデル村ソルテア (Saltaire⁹) と村内の学校、非行少年の更生訓練船を含む様々な種類の訓練船などが選ばれていた (図4) (図5)。岩倉使節団本隊が主体的に選択したとは考えにくい教育機関ばかりで、イギリス側が中心に視察先の選定を進めたことは明白である。使節団本隊の迎撃には、パークス駐日公使¹⁰らが中心となり、旅程全般を組んでいた。

このような視察日程が組まれたのは、使節団本隊より一足先にイギリスで任に当たった別働隊との重複を避ける配慮が働いたこと、パークスがたたき上げの外交官で名門校へのつてがなかったこと、イギリスの名門校は実学をあまり重視しない学風で岩倉使節団の目的意識には合わなかったこと、産業視察とセットにした教育視察を行なう方が効率的とイギリス側が考えたことなどの要因もあるが、イギリスの「個性」を強調するような教育機関が並んでいたのは何故なのか。このような選択がなされた背景を検討する

7 新島は各種キリスト教会について田中に報告したが、その内容は『理事功程』には盛り込まれなかった。これも異文化接触における、取舍選択の一つの形だったと言えるだろう。

8 クライスツ・ホスピタル校 (Christ's Hospital) は 1552 年に創立され、シティー (the City of London: イギリスの金融・商業の中心地) と密接な関係にあった。

9 ソルテアは、アルパカ紡績で財を成したタイタス・ソルト (Sir Titus Salt) が、ヨークシャー (現在のウェスト・ヨークシャー) に建設したモデル村。2001 年にユネスコの世界遺産に登録されている。

10 サー・ハリー・パークス (Sir Harry Parkes: 1828 ~ 1885)。中国勤務を経て、1865 ~ 1883 年に駐日公使を務めた。

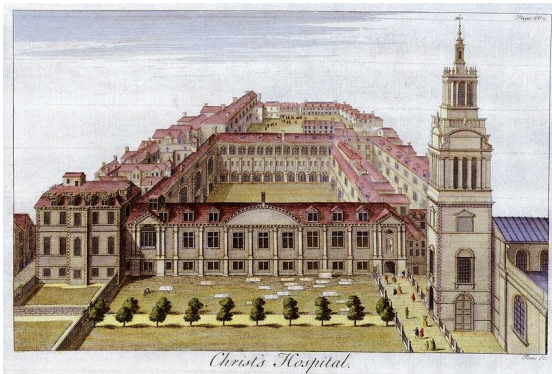


図4 クライスツ・ホスピタル校 (Christ's Hospital)

出典：TOMS, William Henry, *Christ's Hospital in London*, c.1750, in STOW, John, *Survey of London*, 1755. 岩倉使節団が訪れた1872年にはプールもあった。「校内に水遊の所あり是又米国にて不見ものなり」明治5年8月9日(1872.9.11.)付(『木戸孝允日記』第二巻、230頁)。



図5 訓練船クラレンス号のマストに鈴なりに並ぶ少年たち

出典：RIMMER, Joan, *Yesterday's Naughty Children*, (Manchester: Neil Richardson, 1986), p. 23. クラレンス号(The Training Ship Clarence)は非行少年の更生訓練船で、大勢の少年たちが正装してマストに登り、賓客に対して歓迎の意を表すのが習わしだった。

上で見落とせないのが、イギリスの公教育整備の立ち遅れである¹¹。

教育に強い関心を示している岩倉使節団が、最初の訪問国アメリカで、既に数多くの小中学校などを視察し目が肥えていたことをパークスたちは把握していた。イギリスで類似した教育機関を見せると、イギリスの立ち遅れが露見するおそれがある。だが、日本側にイギリスの事情を悟られたくない。そこで産業政策や非行抑止政策などと

11 イギリス公教育の立ち遅れについては、多数の研究書が取り上げているが、拙著『ヴィクトリア朝の福澤諭吉と岩倉使節団』(慶應義塾大学法学研究会、2023)も参照されたい。

結びついた教育現場、地域密着型やモデルビレッジと結びついた学校を見せることによって、日本の近代化に役立ちつつ、イギリスの優位性を印象づけようとする思惑が働いていたと考えられる。

2. 情報をめぐる駆け引き

教育視察に限らず、イギリス側が「見せたい」情報、「見せたくない」情報、一方の日本側が「見たい」情報をめぐる駆け引きが、岩倉使節団本隊の旅ではたびたび繰り広げられていた。それは新島襄の旅とは対照的で、使節団本隊の旅では、日英間の情報をめぐる攻防戦があちこちで展開されていたのである。産業上の情報について、イギリス側は手の内を見せようとせず、問われても肝心の情報をあまり提供しようとしなかった。

また、外交上の思惑が深く関わる情報の提示もあった。例えば、使節団本隊の旅程には、イギリス国内の視察先で頻繁に狩猟 (hunting) 見学が設定されていたが、これには狩猟の重要性を印象づけ、日本国内における居留民の内地旅行を緩和させようと図るイギリス側の意図が潜んでいたのである。『米欧回覧実記』は外交問題に触れていないが、不自然なほど頻繁に登場する狩猟見学に関する記述から浮かび上がるのは、狩猟に絡めたパークスの外交上の思惑であり、同時に、イギリス側に影響されず、むしろイギリスの大規模土地所有者層の生活のあり方などについて、冷静な考察を行っていた日本側の姿勢である。

3. 久米邦武の果たした役割と異文化接触

使節団本隊がイギリス滞在中に経験した〈情報をめぐる駆け引き〉を経て集積した情報を、久米邦武は編纂する責務を担ったが、「見た」「見ようとした」ものに加え、「見せられた」ものに対する評価を行なう作業は、〈知〉の論評へ向かう旅でもあった。

『米欧回覧実記』の中で、教育に関する記述は比較的短いが概ね正確で、教育内容についても冷静に評価している。また久米は、学校教育にとどまらず、広い意味で〈知る〉〈学ぶ〉枠組みの中に教育を位置づけており、例えば大英博物館の見学を通して、「博物館ニ觀レハ、其国開化ノ順序、自ラ心目ニ感触ヲ与フモノナリ〈中略〉進歩トハ、旧ヲ舍テ、新キヲ図ルノ謂ニ非ルナリ」(『実記』二、114頁)と評価した。「古今ノ進歩」の歴史を記して後世に伝えたり、博物館によって視覚に訴え感動させたりするなど、人を啓蒙していく教育のあり方は重要であり、それを怠って東西の違いを習性の違いのせいにするのは無策だ(『実記』二、115頁)と戒めている。このように、教育から更に視野を広げ、〈知〉のあり方を模索する議論が『実記』の中で展開されていた。

約4ヶ月に及ぶ岩倉使節団本隊の滞在中を通して、イギリス社会のプラス・マイナス両面を体感したことにより、久米は『実記』の中で、包括的な分析に基づき、イギリス社会の富強の淵源を探り、文明観・歴史観を形成していった。久米はどの陣営からも一定の距離を保ち、冷静な視点で分析を行なったが、これはまさに〈知〉の論評の姿勢と言

えるだろう。儒学者だった久米の起用の成功については、今更申すまでもないので省略するが、最後に久米の歴史観の形成について触れ、本稿を締め括りたい。

帰国後、『米欧回覧実記』の編纂事業に携わった後、久米は洋学ではなく日本古代史研究の道に進んだ。歴史家としては、一貫して実証主義史観の立場をとり続けたという（田中彰 2002、101～103 頁）。だが 1892 年に発表した論文「神道は祭天の古俗」が問題視され、久米は帝国大学教授を追われることとなった¹²。21 世紀の今日から見ると、論文そのものに政治的な意図は見られず、むしろ合理的・客観的に神道を分析した内容だった。洋学ではなく古代史に進み、このような歴史観を抱くに至った久米の後半生は、彼の人生における、〈知〉の論評の次なるステージであった。久米が保ち続けた、合理的とも言える実証主義史観の形成には、岩倉使節団本隊に随行して世界各国の文化に触れ、歴史や文化を大きな枠組みでとらえる姿勢を体得したことと、『実記』編纂の務めが大きく影響したのではなかろうか。そしてこれも異文化接触のもたらした文化創造と言えるのではないかと考えている。

主要参考文献一覧

〈一次史料〉

外務省調査部編纂『大日本外交文書』第 4 巻・第 5 巻・第 6 巻（日本国際協会、1938～1939 年）。

『木戸孝允日記』全 3 冊、（日本史籍協会叢書 74～76、東京大学出版会、1932～1933 年）。

久米邦武編・田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』全 5 冊（岩波文庫、1977～1982 年）。

田中不二麿『理事功程』全 3 冊（文部省、1873 年）。

新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』全 10 巻（同朋舎、1983～1985 年）。

Great Britain, Foreign Office General Correspondence, *Japan*, (F.O. 46), volumes covering the years 1871–1873.

The Illustrated London News, (London), 1862, 1872.

The Jardine Matheson Archives, Parkes Papers. (Cambridge University Library, Manuscripts Room 所蔵)

〈研究書〉

田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店、2002 年）。

平野健一郎『国際文化論』（東京大学出版会、2000 年）。

太田昭子『ヴィクトリア朝の福澤諭吉と岩倉使節団』（慶應義塾大学法学研究会、2023 年）。

12 久米は修史編纂事業に従事し、1888 年に帝国大学教授に就任したが、1892 年に帝国大学を追われた。後年、久米は東京専門学校（現・早稲田大学）に迎えられたが、招請したのは、久米を岩倉使節団の権少外史に推挙した、同郷の大隈重信である。